

「忍耐と慰めを学んで希望を持ち続ける」

2018年10月31日

ローマの信徒への手紙 15章1節～6節 わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおりです。かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教導するためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。

パウロは、「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです」と言う。強くない者の弱さを担うことは、自分の満足には至らないが、共に喜び合う愛が生まれ、自他共に向上することであると言っている。そして、そのように生きる理由は、主イエスにあると説いている。「キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。『あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった』と書いてあるとおりです。」キリストはご自分の満足を一切求めず、ただ、与え尽くす生涯を全うされた。福音書を読めば、その姿に圧倒される。私は、初めて聖書を読んだ時、こんな人がいるのであろうかと思った。パウロは更に、キリストについて「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と注解している。この言葉は、詩編 69 編 10 節の「あなたを嘲る者の嘲りが／わたしの上にふりかかっています」からの引用である。神への熱心が、逆に、この世のそしりを一身に受けるという旧約聖書の義の僕を歌った1節である。主イエスは神への真実を全うされたが、そのために、そしりを受け、十字架の死に至った。パウロは、主イエスはご自分を求めず、人の弱さを担って、そのことの故に、死を選び取っていかれたことを、覚えよと諭しているのである。

聖書に書かれた事柄は、全て私たちを教導するためのもので、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのである。パウロは、ローマ書 5 章 3 節、4 節で「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」と書いていた。パウロのキリスト教への回心後の生涯は、苦難と忍耐の連続であった。その中から練達を学び、慰めを受けた。そこに、揺るぎない希望を見出したのである。パウロにとって希望が救いであった。「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」既に、キリストに義とされ、終末の全き救いを持ち望む「中間時」にあるキリスト者は、今を忍耐し、慰めをいただきながら、希望に生きるのである。

忍耐と慰めの神が、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、心と声を合わせ、イエス・キリストの父である神を賛美させてくださるように。パウロの祈りである。